浄土　第80巻5号（毎月1回1日発行）平成26年6月1日発行　昭和10年5月20日第3種郵便物認可

浄土

monthly JÔDO

2014
June

6

法然上人鑽仰会

2014
表紙のひと

花写

芝崎純子

撮影 Keizo S.

ヨーロピアンフラワー連盟講師資格を取得し、
2007年から東京・港区白金台の自宅でフラワーサロンを主宰。
生花、プリザーブドフラワー・アーティフィシャルフラワーなど
ヨーロピアンスタイルを基本のLesson開催のかたわら、
フラワーギフトアレンジを提案。
特に、仏事の供花を扱うブランド【花写】を立ち上げ、
生花に特殊な加工をして長期保存できる
プリザーブドフラワーの仏花ギフトアレンジに定評がある。
墓石用のアーティフィシャルフラワーのアレンジ等
仏壇の供花は、
一人暮らしで水替えが大変という年配の方々からも人気で、
手元供養で小さな花のアレンジを添えるのは、毎日の供養の際、
遺された方の心に穏やかさ優しさを与える、という。
法事やお盆、お彼岸など、また、お悔やみのフラワーギフトとして
注文も多く、いま各界注目のアーティストである。

花写　http://www.ca-sha.net

◉今月号は浅井竜介氏の花器を使ったアレンジです。
陶芸家●浅井竜介Webサイトhttp://mocakoo.blogspot.com/

浄土

2014/6月号　目　次

新連載　法然上人のお言葉③……梶村　昇　英訳　河西良治　2
善導大師と六時礼讃……原口弘之　4
会いたい人　中森貫太さん（上）……関　容子　10
響流十方……袖山榮輝　20
友好の絆……森　清鑑　24
連載　蓮門句会……32
連載小説　渡辺海旭……前田和男　34
誌上句会……選者＝増田河郎子　44
マンガ　さっちゃんはネッ……かまちよしろう　47
編集後記……48

表紙・表紙裏＝2014『浄土』表紙の人　【花写】芝崎純子

背表紙裏＝泰雲の美味探訪

表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人のお言葉

3

ご法語

3　この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれにはずれ、本願にもれ候うべし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし　（「一枚起請文」）

現代語訳―このほかに私が、救われる奥深い教えを知っていながら隠しているというのであれば、私自身、釈尊と阿弥陀仏の救いから洩れるであろう。念仏を信じようとする人は、たとえ釈尊一代の教えをしっかりと学んだとしても、一つの文字も知らない愚かな身と痛感して、名ばかりの尼や入道と同じように、ただひたすらに念仏をすることである。

Honen Shonin's Sayings

If it were true that I knew some other more profound teachings for salvation and hided them, I myself would be omitted from the salvation of Shakuson and Amida Buddha's Original Vow. Even if they learned Shakuson's lifelong teachings thoroughly, those who intend to believe nembutsu should realize themselves to be stupid persons of total illiteracy and do nothing but earnestly call the name of Amida Buddha behaving themselves not like learned persons but like ignorant nuns and priests.

(from Ichimai kishomon)

解説

これは「一枚起請文」の後半の部分です。「起請」とは「自分の言説に偽りのないことを神仏に誓うこと」です。当時、人々はみんな、仏教とは難しいものだという先入観を持っていたと思うのです。そこにもってきて、南無阿弥陀仏と称えれば、極楽に往生できると説いても、そんな易しいことで、極楽に往けるわけはない、上人はもっと深い教えを知っているのに、私たちに教えてくれないのだと言って、なかなか信じてくれません。そこで上人は、自分の救いを賭けて、そういうことはないと誓いました。それが「一枚起請文」です。

昔、私は「一文不知の愚鈍の身になして」という言葉が、なかなか納得できませんでした。「一つの文字も知らない愚鈍の身になって」と言われても、すでに文字を知っているのに、どうしてそうなれるのかと屁理屈をつけて考えていたからです。その後、これは「人生の生き方については、一つの文字も知らないような自分と痛感して」ということだと気づいて、目が覚めた想いに浸ったことがあります。宗教とは、難しいことを知ることではなく、信ずるということなのでしょうが、それがまたなかなかできることではないようです。

梶村昇
亜細亜大学名誉教授

Commentary

This passage is the latter half of Ichimai kishomon. The word kisho means "swearing before the gods and Budda there is no untruth in what one says". It seems to me that in those days everybody had a preconceived idea that Buddhism was difficult. At that time, even if reciting Namu Amida Butsu was said to make the birth into the Paradise certain, they thought it was impossible to go to the Paradise in such a simple way. They did not trust Honen so easily, saying that he did not try to teach his more profound truth to them. Then, Honen risked his own salvation and swore that what they said was not true. His words at that time became Ichimai kishomon.

Once I could not easily grasp the meaning of the phrase "realize themselves to be stupid persons of total illiteracy" in the above quotation. Considering that I did have the knowledge of how to read and write, I quibbled over why persons with such a high literacy were able to realize themselves to be persons of total illiteracy. Later on I became quite impressively aware that "stupid persons of total illiteracy" was intended to mean stupid persons who have no knowledge of how to live in the world. Religion is supposed not to know but to believe what is difficult, but such a thing also does not seem to be easy to fulfill.

英訳……河西良治 中央大学文学部教授

善導大師と六時礼讃

『善導　六時礼讃―浄土への願い』発刊に当たって

清岸寺副住職
原口弘之

皆さんは善導大師という方をご存じでしょうか？　浄土宗のお寺の本堂には、中央にご本尊の阿弥陀如来、向かってすぐ右に観音菩薩、向かってすぐ左に勢至菩薩がお祀りされています。これを弥陀三尊といい、その両側にも僧侶の姿をした像がお祀りされています。向かって一番左側は浄土宗を開いた日本の法然上人（一一三三～一二一二）ですが、反対側の向かって一番右側が中国の善導大師（六一三～六八一）です。

善導大師は、法然上人の時代から約五百年さかのぼった時代で中国・唐の時代、ちょうど小説『西遊記』に登場する三蔵法師のモデルとなった玄奘三蔵とほぼ同時代の人です。中国の浄土教は大きく廬山の慧遠流、慈愍三蔵流、道綽・善導流の三つの流れがありますが、善導大師は曇鸞大師・道綽禅師の流れをくむ中国浄土教の大成者です。時代も国も離れていますが、法然上人が師と仰がれたお方です。法然上人は善導大師の『観経疏』という書物を読み、「偏依善導一師」といって偏に善導大師の教えに依るという立場で浄土宗をお開きになりました。浄土宗では法然上人を宗祖と呼ぶのに対し、善導大師を高祖と尊称しています。

善導大師は、臨淄（山東省臨淄県）という所に誕生されました。一説には泗州（現在の安徽省泗県）ともいわれます。幼年にして出家をされ、『観無量寿経』を仏道の拠り所といたしました。長安城外の南、陝西省藍田県の終南山悟真寺に入り、貞観（六二七～六四九）のころ、西河（山西省）の玄忠寺に道綽禅師を訪ねて師事しました。貞観十九年（六四五）、師の道綽が遷化されると、再び終南山に入り修学を重ねます。そして唐の都である長安に出て広く人々を教化いたしました。『阿弥陀経』数万巻を写したり、経典に説く仏の世界を理解しやすいように絵画をもって表現した「浄土変相（図）」（観経曼陀羅）を

三百余鋪も製作するなど、さまざまな活動をしています。

さて、浄土宗の法要で用いられるお経には、節が付いたものが幾つかありますが、その中に善導大師によって作られた「礼讃」があります。一日を日没（夕方、午後四時頃）・初夜（夜の始まり、午後八時頃）・中夜（真夜中、深夜〇時頃）・後夜（夜の終わり、午前四時頃）・晨朝（朝方、午前八時頃）・日中（昼どき、正午頃）という六つの時間（六時）に分け、それぞれの時間に唱える偈（詩のこと）を配したことから「六時礼讃」とよばれます。

法要においてお唱えされる、経本にある「六時礼讃」は、善導大師が撰述した『往生礼讃』（具さには『往生礼讃偈』）の中、「前序」と「後序」を除いたものです。これは『無量寿経』などの浄土経典の要文（主要部分）や浄土教の祖師の著作をもとに五言・七言といった讃文に仕上げています。礼讃とは礼拝と讃歎を意味し、法要においては独特の節をつけて礼拝をしながら読誦いたします。

『往生礼讃』では、六時礼讃の中、日没礼讃の十二光礼のあとに、各時に共通する懺悔、発願、恭敬の偈、および発願文を出し、六時の無常偈を掲げています。経本にある「六時礼讃」は、各時の礼讃に共通する部分とそれぞれの無常偈を六時に配当し、編集を施したものです。

「六時礼讃」は法然上人門下で盛んに行われ、浄土宗では現在も法要において「礼讃」をよく用います。六時礼讃の中で、特に日中礼讃の中の「三尊礼」は、六時礼讃を代表するものとして、浄土宗ではよくお唱えいたします。

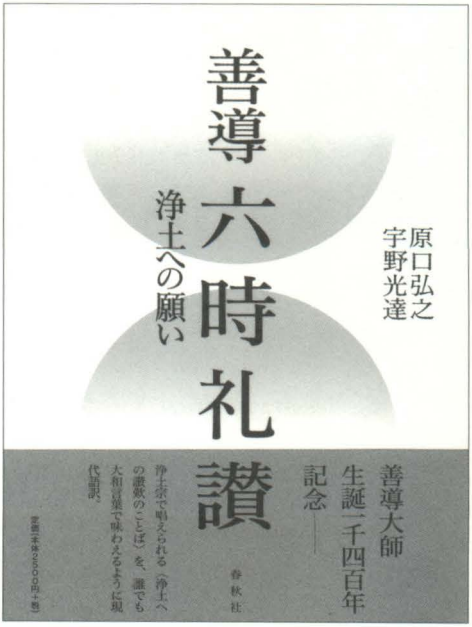
ところで、善導大師が誕生されたのは隋の大業九年、西暦で六一三年ですから、二〇一二年が数え年で善導大師生誕千四百年に当たりました。これを記念して、浅学非才を顧みず、私と私の自坊の職員である宇野光達との二人で善導大師の『六時礼讃』をわかりやすい日本語に翻訳することを志し、作業をすすめてまいりました。

そしてこの度、平成二十六年（二〇一四）四月末に『善導　六時礼讃—浄土への願い』として春秋社より発刊されました。共訳者である宇野の発案により、「礼讃」を五七調の日本の詩歌の形に翻訳し、漢文（白文）と読み下し文と語注を加えています。本文はページ見開きで左右上下の四段に分かれており、右上に現代語訳、右下に漢文、左上に読み下し文、左下に脚注を配しました。

また、現代語訳は、五字一句の偈文を五・七、五・七、……五・七・七の大和歌（和歌）の長歌の形式で、七字一句の偈文を五・七・五、五・七・五、……五・七・七の形式で翻訳いたしました。

ここでは「初夜礼讃」の冒頭部分の訳を紹介いたします。

こころから　崇める　西方　阿弥陀仏（南無至心帰命礼西方阿弥陀仏）



阿弥陀仏の　智慧と願いは（弥陀智願海）
海のよう　広くて深い（深広無涯底）
名を聞いて　往くと願えば（聞名欲往生）
誰であれ　必ず往ける（皆悉到彼国）
われら皆　極楽浄土に　往けますように（願共諸衆生往生安楽国）

長歌の形式は、『古事記』（七一二年）や『万葉集』（七世紀後半～八世紀後半、現存する日本最古の歌集）に見られ、五七調は善導大師の時代に近い古代の日本のリズムです。歌謡曲に繋がる七五調のリズムほどは馴染みがないかもしれませんが、五七調は軽妙な七五調に比べて重厚な力強さがあるとされています。ぜひ、多くの方に善導大師の『六時礼讃』の五言や七言の漢詩の偈文を五・七や五・七・五の大和歌（和歌）の形で味わっていただきたいと思います。

法然上人鑽仰会「講演会」のお知らせ

講師 **佐々木 閑**

「仏教の基本思想
——釈尊から大乗へ」

ささき しずか
花園大学文学部教授　文学博士
1956年生まれ。京都大学工学部工業化学科及び文学部哲学科仏教学専攻卒業。
京都大学大学院博士課程満期退学。米国カルフォルニア大学バークレイ校留学。
専門は仏教哲学、古代インド仏教学、仏教史。
日本印度学仏教学会賞、鈴木学術財団特別賞受賞。毎年２回、東京において「科学と仏教の接点」をテーマとする科学者とのトークセッションを開催中。
主な著書『インド仏教変移論—なぜ仏教は多様化したのか』（大蔵出版）、『犀の角たち』（大蔵出版）、『日々是修行』（筑摩書房）、『生物学者と仏教学者七つの対論』（共著）『律に学ぶ生き方の智慧』（新潮選書）

会場 **大本山増上寺慈雲閣**

東京都港区芝公園4－7－4
地下鉄都営三田線『芝公園』徒歩2分
地下鉄都営浅草線・大江戸線『大門』徒歩7分
ＪＲ『浜松町』徒歩10分

平成26年6月27日（金）

午後3時より4時半まで

会費一般 1,000円
（当会会員無料）

申し込み　会員、一般ともに不要（先着150名）

お問い合せ先
—法然上人鑽仰会—
〒105-0011　東京都港区芝公園4-7-4
電話 03-3578-6947　FAX 03-3578-7036

主催　法然上人鑽仰会
後援　浄土宗総合研究所

連　載

会いたい人
関 容子

撮影／タカオカ邦彦

何十年か前、私が初めて深い感銘を受けたお能は、美少年の遊狂物『天鼓』だった。中国の鼓の名手である少年が、天から授かった鼓を帝に所望され、拒むとその身は呂水に沈められる。召し上げられた鼓はふっつりと音を止めたが、勅命によって少年の父が打つと妙音が響く。帝はこれを憐れみ、呂水に鼓を手向け弔うと、やがて少年の亡霊が現れ、自ら鼓を打って舞い、夜明けと共に消え失せる。深々とした夜の冷気の中を天才楽人の美少年が無心に舞い遊ぶ姿には詩情が漂い、実に夢幻的で優美だった。

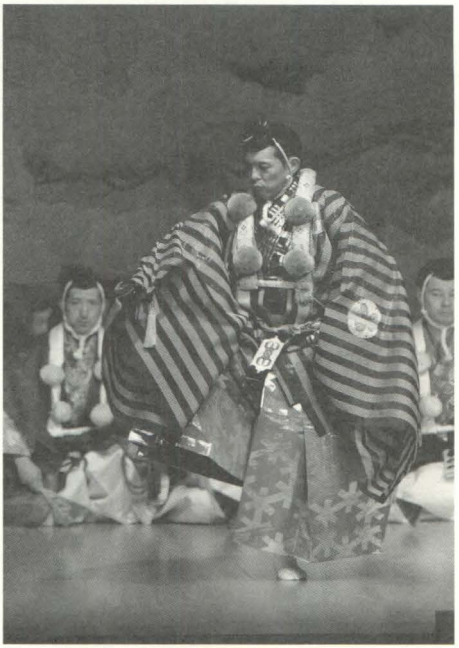
そう言えば、谷崎潤一郎の『春琴抄』の鵙屋春琴が大切に飼っていた鶯は天鼓と名づけられていたけれど、昔の富有な町人階級の能楽の素養はかなりのものだったのだろう……と私は客席で思いを巡らしていて、お能はこうやってそれぞれが自由に楽しめばいいのかな、と少しわかった気になったものだった。

観世流能楽師シテ方の中森貫太さんの『能を知る会』（国立能楽堂と横浜能楽堂それに本拠地鎌倉能舞台）に通い出して数年が経つ。

私は『天鼓』に感動してから何度か能を観るうちに、能面からはみ出したぷっくりした大きな顔や、太い頸、日焼けしたごつい指、それに何よりも能面の中にこもるような不明瞭な発声が気になり始めて、いつしか能楽堂から遠退いてしまっていた。

それがふとしたことから中森さんの舞台を観て、まず能面の中からとは思えないほどはっきりと響く美声、すっきりした立ち姿、能面にきちんと収まった小顔、色白の頸や指の美しさにもすっかり魅了された。

何度目かに貫太さんが歌舞伎の『勧進帳』の原曲『安宅』のシテの弁慶を直面（面をつけない）で演じるのを観て、このときから私にも能の面白さがだんだんわかりかけてきたのかな、という気がしたものだった。たしかに『道成寺』や『船弁慶』など、歌舞伎と対



シテの弁慶を直面で演じた中森さん。
この舞台で関さんを能の世界に惹きつけた。

比できる演目はわかりやすくて面白い。

ところで貫太さんは、ただ手をこまねいていてはお能が博物館入りしてしまう、という強い危機意識を父の中森晶三師から受け継いでいて、演能の前に解説をつけたり（そのレギュラーの一人、葛西聖司氏は私が御紹介した）、終演後は毎回客席からの質問に答える、という努力を怠らない。

重い装束を解き、汗を拭く間も惜しんで黒紋付に着換え、能舞台に走り出てくる姿はちょっと感動的でさえある。

どんな質問が出ても淀みなく答えられる知識の豊富さにも驚かされるが、まずはこれまでに一番多く出た質問について訊ねてみることにする。

「拍手のタイミングについての質問が最も多いです。拍手は元々日本にはなかった習慣でして、柏手（かしわで）は神様を呼び出すときの神聖な行為で、人前でむやみに手を叩くことはなかったですからね。お能は江戸時代、お殿様が演じて家来が拝見してるわけですから、主役がお客より偉いというスタンスなんです。ですからシテのことを『太夫』と呼んで、お能は『拝見する』というわけです。『船弁慶』の義経役などに子方（こかた）を使うのは、主役のお殿様が能役者や家来が演ずるたとえ役の上での目上に対してでも頭を下げにくいからで、その点、

無心な子役にならまぁ我慢ができる、ということなんですね。

それで拍手ですが、明治になって日本国憲法ができるときに下敷きとなったのが英国帝国議会の憲法であって、英国議会では拍手で承認を取りますから、それと一緒に拍手の習慣が日本にも入ってくるわけです。ですから劇場で拍手をする風習は多分西洋音楽のコンサート会場あたりが一番早いかもしれません。歌舞伎は庶民の娯楽ですから、拍手の代りに掛け声が発達していたんでしょうが、ここにもだんだんと拍手の風習が入ってきます。能に入ってくるのは一番遅くて、おそらく戦後からなんじゃないでしょうか。

で、能がどこで始まってどこで終るかと言えば、まず開演前に橋がかりの揚幕の後ろで囃方が演奏する楽器の調べを始めて、それが終るとまず笛が幕の横から登場する。続いて大鼓小鼓太鼓と出て、それから地謡（ぢうたい）（コーラス）が上手から出て位置につくと、いよいよ幕が揚がってワキの役者の登場となります。

それでどこで終るかというと、役者が全員橋がかりから入って、地謡が上手へ入って、囃方がまた笛から順番に入りますから、太鼓が幕の中に消えたところが能の終りになります。

拍手をするならば、囃方が入り始めたくらいからが、いいタイミングではないでしょうか」

なんとなくお能では拍手は歓迎されていない雰囲気がうかがえる。

「ええ、プログラムに拍手は不用、と断ってあるのもあって、『拍手いやーんの会』というのもありました（笑）。お能はシーンと観て、何かを深く感じて静々と帰ればいい、という考えなんですね。実際に『井筒』とか『野宮（ののみや）』とか、しっとりとした曲ですと、拍手が雰囲気をこわすことがあります。また、舞台に作り物（装置）が置かれている場合、後見が姿勢を正して気を引きしめて作り物を

引くという演技をし続けているわけですから、そこで帰り仕度を急いだりなさることのほうがこちらとしては望ましくないんです」

『井筒』は年若な妻が業平へのひたむきな愛を、思い出の地で静かに「月下の舞」を舞う。

『野宮』は六条御息所が、光源氏の正妻葵上との野宮での車争いで敗れたときの幻影に、なお燃え残る情念の炎を燃やす。

たしかにこういう静謐な感じの演目に騒がしい拍手はそぐわないかもしれない。

次に、歌舞伎で言えば花道に当る橋がかりの出入口にかかったお幕の色にも、何か意味合いがあるのか、という質問。

「緑、赤、紫の三色が決まりの色で、緑は朝、赤は昼、紫は夜を表していて、真ん中の赤の両脇にはその中間色である黄色と白が配色されています。これは一日二十四時間、背景として使えることを意味しています。

幕の裾が竹に結んであって、二人で上げ下げするんですが、曲によってみんなタイミングが違いますからね、出囃子によって早く上げたり、ゆっくり上げたりの。内弟子に入るとまず揚幕の片棹をやることから見習いスタートなんです。客席から見える側が上、見えない側が下で、後輩は下ですが、二人がリズムを揃えてサッときれいに上げなくてはいけないので、これでなかなか難しいものなんです」

上下と言えば、能の流儀にも「上がかり」とか「下がかり」とか、不思議な言い方を聞いたことがある……これは私の質問。

「能の流派は五流あって、本来は四座一流と申します。観世、宝生が上がかり、金春、金剛、喜多が下がかりで、これは奈良・興福寺の座付であった四つの流儀のうち、観世と宝生は京都へ上ったので上がかり、奈良にとどまった金春と金剛が下がかり、というわけなんです。喜多流は江戸の八代将軍吉宗のお声がかりで新しく出来た流儀で、当時ものすごくもめたらしくて、ですから涙ぐましい変え

方をしています。たとえば音読みを訓読みにするとか、文章も少し変えるとかして、しかし長さだけは変えないようにしないと囃方がつきあえなくなりますから。いろいろ軋轢があって、喜多流はとかく新参者扱いされているんですが、あちらに言わせればわれわれは武家だけど、お前たちは庶民じゃないか、ということになるんです（笑）」

なんだかものすごく面倒な格式があって、息の詰まりそうな世界に思える。

能ではシテ方の家に生まれなければ生涯シテをつとめることはできないし、ワキ方はずっとワキ方。それでもワキが大活躍する演目もあり、ワキの家元も、人間国宝もいるという。

「はい、シテは別段のこともなくて、ワキが大変に難しい演目もあります。『張良』『檀風』『谷行』などがそれです。張良は漢の高祖の三傑の一人ですが、馬上の老人が落した沓を取ってはかせたことで兵法の伝授を約束される夢を見て、実際にその場所へ行くと、老人が遅刻を叱責して、五日後を約して別れます。ここでもう一度試練を与えられて、老人が沓を川の中へ蹴り落すと龍神が現れて沓を奪われるんですが、張良は恐れずに剣を抜いて立ち向かうので、龍神が沓を返してくれる。この龍神は実は観音菩薩の化身で、老人は張良に兵法の書を授けたのち、自らは高山の頂きで光を放つ黄石となる、という話で、この黄石公がシテ。題名役の張良がワキなんです。ワキは普通はあまり動かないものなんですが、この曲では流し足とか合膝とかの激しい動きの見せ場があるんです。

ワキ方の家元の家では、長男が生まれるとお七夜の晩に、その子を懐に抱いて『張良』を一回舞うしきたりがあるそうで、そういうところもなかなか面白い世界と言えるのではないでしょうか。

因みに、私は十六歳のときにこの龍神が初面（初めて面をつけて舞台に立つ）でした。

せりふが一つもない役なので、まだ声が固まってない者にやらせても問題がないわけで、このとき以降紋付きの袖を短くして大人扱いになるんですが、私の息子の健之介の場合も初面はやはりこの『張良』の龍神でした」

貫太さんはれっきとしたシテ方中森晶三師の御曹子だが、その祖父は能楽とはまったく無縁で、書店の経営を生業としていた、と聞いてびっくりした。

これだけ大変そうな能の世界で、晶三師一代でシテ方一国一城の主の地位を築く奇跡のようなことが起り得るとは、どんな経緯があったのだろう。

「まず終戦直後という時の運があったこと、鎌倉に居を構えるという地の利を得たこと、さまざまな人との出会い、それにいろんな面での父の能力の高さ、それらがみんな味方したのではないでしょうか。しかし今現在でしたら決してこんな奇跡は起り得なかったでしょうね」

中森晶三師は昭和三年、東京・武蔵境に生まれた。学校の成績は優秀で、旧制一高（現在の東大教養学部）を卒業している。

「父が理科一年のころ親戚にあたる女性能楽師の津村紀三子先生という方が、疎開先から戻るところがなくて、武蔵境の家に寄寓なさっていたんです。この方は男子専制の戦前の能楽界で、ただ一人、玄人の女性能楽師として認められた方で、父はほんの軽い気持で能の手ほどきを受けるんですが、どんどん能楽にのめりこんでしまうんですね。津村先生の教え方も天才的にうまかったらしいですが、父の覚えの速さも抜群で、先生が結核で倒れると、すぐに代稽古を引き受けて先生の生活を助けたそうです。前の日に習ったことを翌日には教える、という自転車操業で、お弟子何人分かの謡を電車の中で暗記しながら行って、今度は明日のお弟子の分を暗記しながら帰る、といったことも平気でこなしていたようです。

謡と舞ばかりではなく、まず大鼓を覚えろと言われて稽古に行って、わずか三か月で『橋弁慶』を打った、ということです。あんまり覚えが速いんで、大鼓のお家元から養子になってあとを継いでくれと言われたそうですが、決心がつかなかった。でも、もし囃方の家元になっていたら、父の人生もまた違ったものになっていたと思います」

能楽師は総ての囃子事の稽古を身につけなくてはならない。大鼓のほかに笛、小鼓、太鼓とあるが、晶三師は理科出身の分析思考能力を存分に発揮して、驚異的な速さで総て克服する。

「父は宗家、職分家に五年間は内弟子に入る、という正式な過程も踏んでいませんし、異端児の独立愚連隊なんですが、都心からちょっと離れて目の届きにくい鎌倉の地にいつの間にか自分の能舞台を作って、能面、装束を揃えるのに普通は三代かかるというのを父は一代で揃えてしまうという、経営能力のほうもすごかった人ですね。それからこれは私もずっと受け継いでいますが、中学生高校生に能を観せる運動を始めたり、鎌倉に薪能を定着させたり、とにかく精力的でしたね」

その昌三師を陰で大きく支えたのが統子夫人、貫太さんの母だろう。

『中森晶三――孤軍奮闘の能楽人生一代記』によれば、晶三師の結婚は三十一歳のとき。多忙で恋愛をする暇もなかったので、今年こそ最初に来た縁談の人と結婚する、と母親を安心させる。ところが見合いが仲人の都合で流れ、ほっとしていると、翌日の早朝、四歳年上の女弟子が「亭主と離婚してきたから結婚して」と飛び込んできた。びっくりするが、どうせ今度の縁談で結婚するつもりだったのだからこの人でいいや、と晶三師は承諾する。

「父の結婚で、女弟子が半分に減ったそうです（笑）。ですから私は見合いで結婚しました。父と母はいつも一緒、というか、母はどこへ行くのにも父について行って決して目を

父の奔走により演じる事ができた「鷺」の舞台。
中森さん13歳の時だった。

離さなかったですね。子供の私などはそっちのけで、鍵っ子だったこともしばしばでした。

母は社交の面でも本当によく父を助けてましたし、父が大病をしたときなんかも献身的につきそってましたし、本当に仲のいい夫婦だったと思います」

貫太さんは昭和三十六年、鎌倉で生まれた。物ごころついたときはもう舞台に立っていて、初舞台は『老松』（仕舞）。三歳だった。

「基本的な、すり足で歩く稽古とかではなく、『隅田川』や『船弁慶』の子方に出るとか、その都度、与えられた役々を教えてもらうのが精一杯でしだ。十三歳のとき『鷺』の大曲を披（ひら）かせて（初めて演じる）いただきました。

この曲は年齢制限があって、十六歳以下か六十歳以上でないとつとめてはいけない、という決まりがあります。白鷺の曲なので人間が白いときしか演じてはならない、汚れてる間はダメ、というんですが、父は還暦を迎えても油切ってましたし、十六歳というのも危ないもんですよね（笑）。しかし子供の鷺は扱いが重いんです。本来、宗家、職分家の長男までが演じるもので、弟子家の子供がやるものではない、というわけです。それでも父がどうしても私にやらせたくて、まず職分家

である先代観世喜之先生のところへ行ってお願いして、家元に申請を出した結果、素人としてやるなら認める、という素人免状を出してくれました。素人向けは、右、今般伝授す、と書いて、裏に何々殿、と私の名前を書く。玄人向けは、右、今般誰々に伝授す、と表の文面に呼び捨てで書くんです。

しかも『鷺』の装束は鷺冠、白垂、白鉢巻、襟白二枚、白着付……帯も大口（袴）も白づくめなんですが、弟子家が演じるときはどこかに色をまじえないといけない。それで私の場合、襟を一枚だけ薄いピンクにしたんです」

『鷺』は、神泉苑の池のほとりに佇む白鷺を見た帝が家臣にこれを捕えてくるよう命じる。鷺が驚いて飛び去ろうとすると、家臣が「勅諚ぞ」と呼びかけると、鷺がスーッと舞い戻ってきて捕えられる。帝の威光が鳥類にも及んだことを帝が喜んで、五位の位を与えて放させると、鷺は喜んで舞いながら昇天してゆく、という筋。

「舞の中で『洲崎（すさき）の鷺の羽を垂れて　かしこき恵みは君道（くんとう）の』と言うだけなんですが、父はそのころ私が声変りしてないか、ずっと心配していたようでした。私は父に言わせるとケロッとしていたようですが、やっぱり緊張したんでしょうね。その晩、前からぜん息気味だったこともあって、救急車のお世話になったりしましたからね」

（この項つづく）

弥陀の本願を決定成就して、極楽世界を荘厳したてて、御目を見まわして、わが名をとなうる人やあると御覧じ、御耳をかたぶけて、わが名を称する者やあると、夜昼きこしめさるるなり。されば一称も一念も阿弥陀仏に知られまいらせずという事なし。されば摂取の光明はわが身をすて給う事なく、臨終の来迎はむなしき事なきなり。

法然上人【示或人詞】より

阿弥陀さまはその本願のお誓いを成就し、極楽世界をつくりあげられました。そして、その御目を見まわして、我が名を称える者はいないだろうかと御覧になり、御耳をかたむけて、我が名を呼ぶ者はいないだろうかと、昼も夜もお聞きになられているのです。それ故、たったひと声のお念仏であっても、阿弥陀さまがお気付き下されないことなどありません。それ程までにして極楽に救い摂ろうとする阿弥陀さまの光明が、あなた一人をお捨てになるはずもなく、臨終に来迎されることが偽りであろうはずもありません。

一人にさせるものか

昨秋、実家の兄からハガキが届いた。「この秋、祖父の三十三回忌を迎えるが、来年二月が祖母の七回忌、同じく十一月が実父の十三回忌に当たる。三人まとめて来年の五月某日に法事を営むので今のうちから予定しておいてほしい」と。

実家の祖父が亡くなったのは、私が高校三年の十月のことだった。七十四歳。今でこそ「まだ若い」のかもしれないが、当時の祖父は十分に老人だった。七十を過ぎた頃だろうか、茶の間で小さな心臓発作を繰り返すようになった。兄や私は頓服薬の置き場所と処方の仕方を憶えた。

祖父は東京の下町をさらに離れた、小さな寺の住職だった。夕方になると境内に水を撒いたり、散策に来る人をつかまえては話し込んでいた。それが晩年、サンダル履きのまま、境内からふいといなくなるようになった。どこに行ったものやら心配していると、近所の人や見ず知らずの人が「寺の住職さんだろ」と言って送り届けてくれた。サンダルに大きな字で寺の名がマジック書きしてあったからだ。祖父自身、自分がどこに行くのかどこに帰るのか分からなくなっていた。今でいう認知症の出始めだった。祖父は家族の見守りだけでは、どうにもならない領域に入っていった。人さまの善意が有り難かった。

祖父は焼き魚のほぐし方がを上手だった。思春期だった私は祖父に反発ばかりしていたが、食卓に焼き魚が並べば、密かに祖父の箸の使い方をお手本にしようと試みていた。しかし、その祖父が焼き魚のほぐし方はおろか、箸の持ち方さえ分からず食卓で呆然とするようになった。孫の目にも、遠からずその日が来ることを予感できた。やがて祖父は、サンダル履きで境内に出ることもできなくなり、何をするにも家族の手が必要になった。自分が何者なのかも怪しくなっている。でも、人生の引き際とわかっていたのか、人の手を借りれば必ず「もういいよ、ありがとう」と告げ、ゆっくり時間をかけながらこの世から身を引いた。

祖父のことを思い出したのは、先日、知り合いから、とあるご葬儀の話を聞いたからだ。喪主は年老いた旦那さん。奥さまが亡くなった。喪主のご挨拶によれば、数日前、美容室で髪を整えた奥さまは、機嫌良く庭で大好きな花の世話をしていた。しかし、旦那さんがちょっと目を離した隙に姿が見えなくなった。奥さまは認知症を患っていたそうだ。家族はもちろん地域総出で探し回ったが、三日後、山の岩肌を背にした近所の河原に横たわる奥さまが「発見」されたという。

先ごろの報道によれば、一昨年、認知症による行方不明者が一万人に迫り、うち三五一人の死亡が確認されたという。痛ましい事態であるには違いない。でも思うのだ。事故か病気か、事故ならどんな事故か、病気ならどんな病気か。いずれにせよ、どんなに偉い人だって、死に方、死に場所までは選べない。けれども、死んだ後の世界やその世界への迎えられ方は選ぶことができる、と。

何で亡くなろうが、どこで亡くなろうが、私たちが発する「南無阿弥陀仏」というその声を、阿弥陀さまは決して聞き漏らさない。称えるその姿を絶対に見逃さない。生前に「南無阿弥陀仏」とお願いする限りは、必ず迎えに来てくださる。それが阿弥陀さまの阿弥陀さまたる所以。「南無阿弥陀仏」と称えるということは、じつはそれだけで、極楽世界への往生と阿弥陀さまのお迎えを自ら選んでいるのだ。しかも、阿弥陀さまのレーダーに感知されている。だからこそ選んだとおりのお迎えがあり、選んだとおりに往生が叶うのである。

御仏は善意の塊である。でも、名を呼んでおいただけで、わざわざ迎えに来て導いて下さる仏さまは、仏さま多しと雖も、どうやら阿弥陀さまだけらしい。

南無阿弥陀仏。いつ、どこで亡くなろうが、その声の主のもとに阿弥陀仏は駆けつける。この先、一人にさせるものか、と。

（浄土宗総合研究所　袖山榮輝）

御宿とメキシコを結びつけたもの

友好の絆

第二回

森 清鑑

救助

岩和田の部落は、遭難現場の田尻海岸から一里強、離れた処にある。岸壁の脇道を登って出た海岸沿いの道を左に行く。海縁を迂回するように、上がったり下がったりしつつ行くと岩和田の浜に出る（岩和田、御宿海岸）。当時の村の人口は約三百人。半農、半漁の寒村。異国人遭難の知らせを受け、村では半鐘が打ち鳴らされていた。火事や船の遭難などの緊急事態に村民を集める早鐘である。現場を見てきた人の急な知らせに名主の岩瀬氏は、即座に全員を集め、現場に急行した。

異国人との遭遇は、村人にとって初めての経験。しかも当時の日本は準鎖国状態で、一悶着起きる可能性がある。言葉も通じない。だが、この名主は、まずは命を助けることだ。日本人も異国人もない。岩和田の海岸を汚すな。ここでは一人も死者を出してはならない。村民の漁師も海女さんもその意気に燃えていた。この辺りに、日本人が本来持つ、国際性の血筋を見て取ることができる。

田尻浜に村民が駆けつける。そこは大変な有様で、浜でゼイゼイ息を切らしながら血を流して倒れている者もいれば、同僚を担いで浜に辿り着こうと頑張っている者もいる。屈強な海の男は迷わず、海に飛び込み、溺れかかっている異国人を助けに向かった。波はまだ荒い。船の残骸が押し寄せている。破損した船が傾いて揺れている。海には、まだ大勢の人が助けを求めながら、波に揺れて、血を流し、疲れ果てている。

一晩中、水にもまれた身体は、外房の北風とも相まって、冷え切っている。浜に上がったものの、ぐったりと意識を失って横たわっている人もいる。「火を起こすのだ。たき火だ。おぼれかかっている人を一人も死なすな」。仁王立ちし、次々と下知を下す名主に応えて男女を問わず敏捷に救助活動を行う村の人々を見て、大勢の人に襲われたらどうし

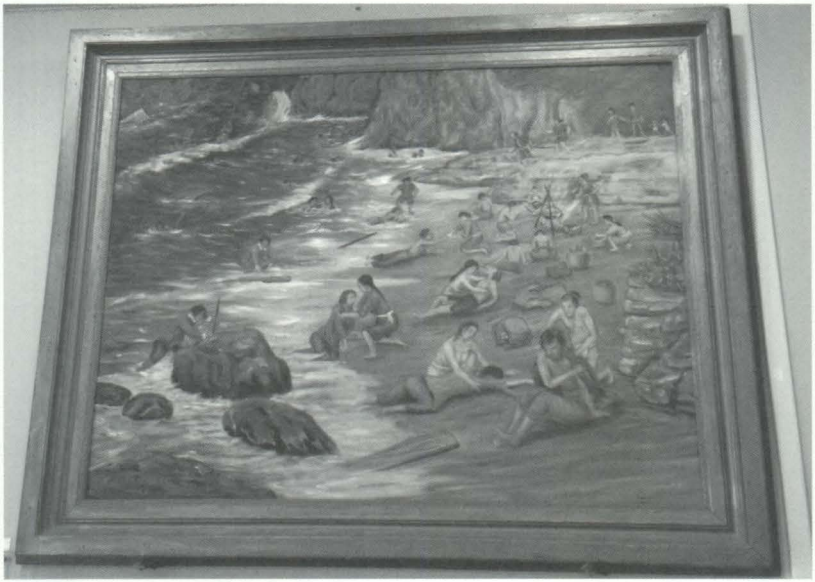
ようとのロドリゴの危惧は、吹っ飛んだ。あの毅然とした態度の名主がこの村のリーダーに違いない。同行の日本人を呼び寄せ、名主に近寄った。「自分は、ヌエバ・エスパーニャの総督でメキシコ・シティというところに帰る途中に嵐に遭い、ここに座礁してしまいました」。

一方の名主の方も、衣服はぼろぼろだが、その立ち振る舞いに漂う品格さをさっきから見ていて、この人は相当、身分の高い人に相違ないと思っていた。「このようなことになって心から同情するとともに哀悼の意を捧げます。我々は皆さん全員を救助します」。通訳を通じての名主のこの言葉を聞いたとき、ロドリゴには熱いものがこみ上げてきて、こんなことになったが、日本に漂着したばかりか、こんなにもやさしい人々に遭遇し、自分達はなんと幸せなことかと再び神に感謝した。

しかし、ロドリゴの驚きは、こんなものではなかった。人々は、冷え切ってぐったりとした乗組員の身体を火の側に運ぶだけでなく、粗末な衣服を脱いで船員の身体を温め始めたのである。なかでも妻や娘の海女さんが、裸になって意識絶え絶えの船員に覆い被さり、身体を温め始めた行為を目の当たりにしたとき、ロドリゴの気持ちは天に達した。

そこには、恥も外聞(がいぶん)もなく、ただ冷え切った異国人の身体を温め、助ける一心さが見て取れた。ロドリゴは日本人の、一寒村に過ぎない人々のこうした行為に感激した。やがて粗末な畑の収穫物であったが、食料が運び込まれた。彼等はうまいの、口に合わないのといっている場合ではなく、昨夜から何も食べてない空腹を満たし、むしゃぶりついた。浜では、大勢のけが人を酒で消毒し、緊急処置が施されていた。なんという手際の良さか。

やがて、息も絶え絶えの人々が蘇生し、人々は次第に元気を回復し、神と村人に感謝した。中には涙を流し、村人の手を取って、



御宿歴史博物館：メキシコ遭難救助の図

謝意を叫ぶ者もいる。言葉は分からないけれども、村人も「良かった」と口々に叫ぶ。中には涙を流して異国人の手を握りしめる者もいる。結局、三百十七名が助かった。波にさらわれて溺死した者五十六名。もし、村民が救助しなければ、もっと多数の犠牲者を出したことであろう。船の破片がまだ漂っている。

救助した人々をこのまま浜風に晒(さらし)しておくわけにはいかない。とにかく村に連れて帰ろう。

村長の命令が下る。元気な者は案内し、崖道を上らせる。ふらふらの者やけが人は肩を貸し、登らせる。とても歩けそうにない人は数人係で担ぐように上げる。上の道に出ると村に向かって一里有余の道を下っていく。ひとまず村の大宮寺（現大宮神社）に。さてそれからが大変である。なにしろ村の人口は三百人。ここに三百十七名の人々を収容するのであるから。名主が中心となって各家に割り振る。名主の家は広いので比較的多人数だが、村人達はこの無理な注文を素直に受け入れ、いやむしろ進んで歓待した。

ロドリゴ達数十人は、村の中心にある大宮寺に引き取られた。ロドリゴは、一息つくと名主や寺の住職に改めて、自分の素性、遭難に至った経緯をくわしく説明した。ここでもメキシコに帰る同行の日本人がいたことが助かった。名主や住職は改めて同情の意を示し、この場所、御宿、岩和田の地理や、ここが領主、大多喜城の殿、本多忠朝の管理下にあることを説明した。彼等を生かすも殺すも、殿次第。しかし、私たちはできるだけのことはするとロドリゴを慰めた。大多喜城は岩和田の北西、約八里離れた山にある。名主はすぐさま異国人遭難と救助したこと、今後、どのように処遇したらよいかを大多喜城に連絡。下知を待った。

各村人の家々では、身体を清めさせ、けが人の治療をし、ご亭主の衣類を着せ、なけなしの食事を提供している。主に農作物、米、

野菜、煮物、そして魚介類。そして酒を振る舞っている。誰もがうまいうまいと食べ、日本酒をこよなくうまいと飲んでいる。ロドリゴも日本酒をワインに比肩するうまさだ…と見聞録に記す。

こうした村民の村を挙げての協力が結局三十七日間も続くことになる。貧村のため、自分達の食事を削っての支援もたちまち底を突く。

ロドリゴの心は落ち着いてくるに従い、涙が出るほど村人の振る舞いに感謝するとともに、今後どうなるのであろうかという不安が再びもたげてきた。嘗てフィリピン総督として刑死寸前の複数日本人を助け、日本に送り返し、家康から感謝状を受けている。その意が届いているであろうか。だが、同時に日本に漂着した異国人が全員処罰されたとの風聞も聞く。

数日後、大多喜の殿からまず親切に接待せよとの知らせが来る。とすぐにロドリゴだけが名主や住職に呼び出されて、どうも城では全員死罪と決めたらしいとのことである。やはり、日本刀の錆になるのか。ロドリゴは覚悟する。それから数日後、大多喜の殿が自ら村に出向いてくるとの知らせが入る。村人に助けられたものの、最早、これまでか。

知らせを受けた大多喜城では、連日会議。家来達は過去の例に従い、全員断罪に処すべし、殿のためですと衆議一決。ところが大多喜の若き殿は、これを一蹴し、逆に厚遇すべきである…と言い放つ。これは、前代未聞のことである。直ぐさま大多喜の殿、本多忠朝は、江戸城に事の次第と自分の考えをしたため、秀忠と家康の意見を求める早馬を出した。江戸城の二代将軍秀忠は、忠朝の意見に同調し、これまた即座に駿府の家康に知らせる。家康の意見は全面的に厚遇すべしということであった。

そんなことは知らないロドリゴは、大多喜の殿の来訪までまさに首を洗って待つ…の心

浄土宗法衣専門
有限会社
古島法衣店
〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話（03）3842-1289
振替00180-2-45231

古き伝統技
三代にわたる信頼

境であった。大多喜の殿は部下三百人を引き連れて颯爽とやってきた。部下はいずれも武器を手にし、身を固めている。溌剌（はつらつ）としているこの若い殿は、ひらりと馬から降りるとにっこり笑ってロドリゴに近づいた。そして手をさしのべ、握手を求めた。面食らったロドリゴは、思わず両手で殿の手を包んだ。すると殿は片膝を折り、ロドリゴの手に接吻したのである。ロドリゴは驚きと共に泪を流した。殿は、ロドリゴを上座に着けると「大変な思いをしたな。ここに漂着したからには、わたしにお任せあれ。大御所、家康様もあなたを歓迎する。不足のものがあれば、遠慮せずに申されよ。我々は村民共々、あなた方を護り、厚遇する」。それだけではなかった。殿は豪華な刺繍を施した着物四枚、刀一振り、牝牛一頭、鶏数羽、果物、米醸造酒を携えて来たのである。「今後は、食料の全てを支給する」。

そう言い残して、大多喜の殿は村民をねぎらい、さっそうと城へ引き上げていった。

お施餓鬼（せがき）の話

仏教コラム……佐々木美冬

お施餓鬼という法要があります。昔はお盆の終わった頃、最近は五月に修されることも多くなったのですが、本来はいつどこで開かれてもいい法会です。

『浄土宗大辞典』には「施餓鬼とは如来の大慈悲によって修道の障害をする餓鬼に飲食を施す法会」とあります。

由来を簡単に説明しましょう。古代インドにおいて、鬼とは死者のたましいであり、同時に祖霊のことをさしていました。さらにそれは子孫による供物を期待していた、というのです。この観念が仏教に取り入れられ「飢えた」祖霊を餓鬼ととらえたのです。

仏教説話に有名な一節があります。

お釈迦様の高弟、阿難尊者のもとに、焔口餓鬼が現れて「おまえは三日のうちに命が尽きる。そして餓鬼道に生まれるであろう」と告げ、「しかしあらゆる餓鬼と多くの婆羅門仙に飲食を供養し、私のために三宝を供養すれば寿命を延ばすことができ、また私も天上に生まれ変わることができる」と教えたのです。阿難尊者は師である釈尊に相談し、その教導のもとに施餓鬼を修して、命を永らえ、餓鬼は天上に生まれることになったという一節であります。

日本伝来当初は、密教系で行われましたが、鎌倉時代末から禅宗や他の宗派でも、これを修するようになりました。

その頃から、除病延命の行法として行われ、やがて死者追善の法会として定着していきました。つまり、飢えた祖霊とは、不慮の死や非業の最期を遂げた人々の、いわば満たされない霊と重なって受容されていったのです。

とくに江戸時代には、天災などに際して、亡魂得脱のための法会として施餓鬼が修されそれが現代にまで伝わったのです。

蓮門句会

勝崎裕彦（東京新宿・香蓮寺）

願い込め施餓鬼神呪で食作法

草も木も静かな修行雨安居

如是我聞一字一字の夏経かな

山﨑龍道（天草熊本・遣迎寺）

煩悩は断ち難きもの寺施餓鬼

お施餓鬼や住持沢山揃はれし

施餓鬼棚西向きなりし浄土向き

5月号の山﨑師の俳句に誤植がありました。まことに申し訳なく、ここに謹んで訂正させていただきます。（編集部）

施餓鬼幡揺らす雨呼ぶ風かとも

施餓鬼棚へ住持の紫衣の尊かり

テーマ《施餓鬼》

遺具の袈裟確とまとひて夏に籠る
鈍根の身に重かりし安居袈裟
夏に籠る僧恪勤の青頭

行正明弘（福岡糸島・正覚寺）

参道に見え隠れして白日傘
異聞あり施餓鬼の寺の秘仏堂
夢を見るための聴力夏衣

佐山哲郎（東京根岸・西念寺）

小説 快僧渡辺海旭
壺中に月を求めて

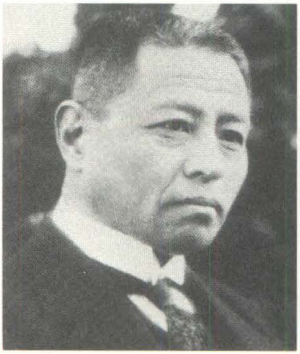
前田和男

第五十一回

第二部

来江（ライン）の古城遥かなり

盟友・荻原雲来　その1



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリア＝ハンガリー帝国元駐日代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵と出会い大いに刺激を受ける。ストラスブルクに戻った海旭は、〝半年先輩〟で同じ宗門海外留学生の荻原雲来から、ヨーロッパ初の比丘であるニャーナティロカの存在を知らされ、強い興味を覚える。

海旭と雲来の留学、辛くも延長

明治三十七年（一九〇四）、夏季休暇も明けそろそろ新学期が始まろうかという盛夏の候、バーゼルの万国宗教歴史学会からストラスブルクに戻った渡辺海旭は、留学仲間の荻原雲来に土産話をするなかで、雲来からヨーロッパで初の比丘が誕生したと聞かされ、大いに興味をおぼえた。海旭の直感では、その碧眼比丘はいずれ大成しそうな予感がした。それを確かめるべく、「後に生まれた特権」を行使して、海旭と碧眼比丘が初めて出会うことになる四半世紀後の日本へと飛んだのだが、そこで明らかになったのは、海旭の予感をはるかに超えて世界の仏教界に大きな貢献をなしつつあるニャーナティロカの凛としたたたずまいであった。

それでは、いま一度、時空移動装置（タイムマシン）の助けを借りて、時計の針を一九〇四年八月末の夕

刻に戻し、海旭が雲来と寄宿を共にする大学近くのアパートの一室へと舞い戻ることにしよう。

＊

ヨーロッパ初の比丘が誕生した話が雲来からでたところで、ひとしきり議論になった。「ヨ、ヨーロッパにもようやく仏教研究やインド学だけではなく、じ、実践がでてきたということか」と海旭は久方ぶりに日本語を使って吃音を募らせた。「こ、これは同じ仏教徒として喜ばしいことではないか」

「いかにも。我らも、うかうかしてはおられぬ」と雲来は頷いた。

「そ、それにしても」と海旭は手にしたビールを一口すると言った。「わ、我らも留学して四年、このまま居続けると、研究のための研究になりはしないか心配だ」

「きみはあちこち首をつっこんでいるから、その心配はなかろう」雲来は頭を振ると茶を啜った。皮肉でも何でもなかった。学究一途の雲来にとって、海旭の痛快なまでの逸脱ぶりは、決して自分にはできないだけに心中ひそかに憧れていた。

「い、いや、日本の国民に、庶民に役に立ってこそだ。が、学問のための宗教であってはならぬ。生活即宗教。こちらのキリスト教もそうだ。ま、ましてや、わが仏教界に、ここドイツからニャーナティロカとかいう碧眼比丘が生まれたとなれば、なおさらうかうかできぬが道理だ」と海旭は持論を展開した。

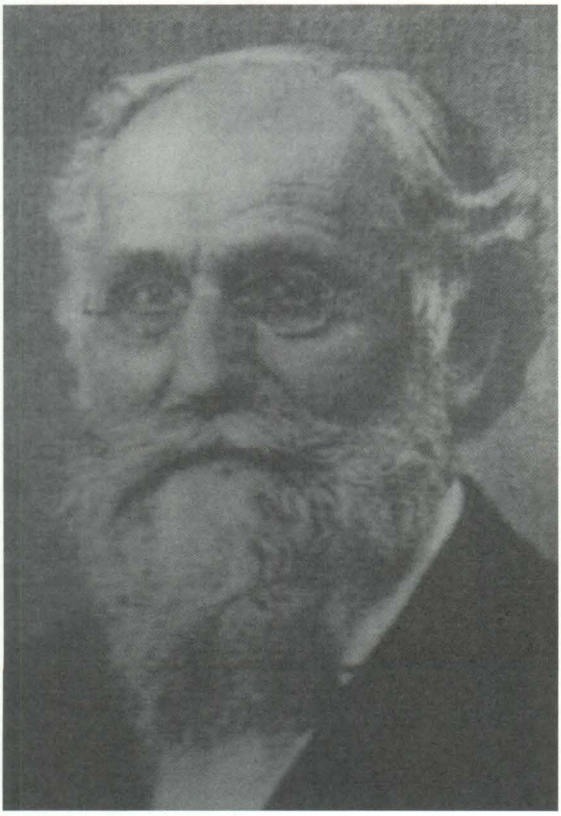
「そういうのなら、君も研究にけりをつけて、そろそろ帰国をしたらどうだ」と雲来は海旭の目を覗き込んだ。

「そ、そこをつっこまれると、お、お互いに頭がいたい」と海旭は笑いながら頭をつるりと撫でた。

ロイマン教授の「保証証明」が留学延長を後押し

実は、二人とも留学の〝年期〟はすでに切

れていた。そもそも出発時には四年で帰国する約束だった。したがって、半年早く当地へやってきた雲来は去年の九月、海旭は十二月で帰国しなければならなかった。それを直前になって、宗門に「延長」を願いでた。当人たちからだけでは認めてもらえそうにないと思い、二人が師事する碩学ロイマン博士に留学延期の根拠を示した「証明書」を書き添え



ロイマン博士

てもらったのである。

海旭も雲来も、宗門の経済的負担の重さを十分に知っていた。学費に加え、下宿代が月に三十マルク、食費も馬鹿にならない。着た切り雀で暮らすとしても月に十マルクはかかる。なんだかんだで、一年で五百～六百マルクはかかる。留学を二年延長すれば二人分でしめて二千～二千五百マルク、当時の日本円に換算すると優に千円は超える。当時千円あれば東京の都心で土地付きの立派な家作が手に入った。宗門としては大いなる出費だ。しかし二人の留学延長は認められた。おそらくロイマンの後押しが奏功したことは間違いないだろう。

それを知って、海旭と雲来は安堵して喜びあった。「浄土教報」にも「荻原渡辺両氏留学期の延長」と題して次のように報じられた。

「独逸国留学中の両師の消息に就ては再三報道せしが尚ほ聞く所に依れば、荻原師は昨年九月、渡辺師は本年四月何れも留学期満了の筈なりしも両師の研修は極めて深邃に其範囲も該博なれば時を惜で奮励せらるるも到底年限内に修了し難ければ両師共期限延長を出願し、宗務所に於ても其成業を期し速に之を容れて各二ケ年延長を許可せられたりと」

「よかった、よかった。ロイマン先生のおかげだ」と朗報に接した雲来は、めずらしく感情を表にだし、海旭の肩を抱いて喜ぶと、訊ねた。「ところで先生は貴兄の留学延長の根拠をどう示されたのだ」

海旭は、「渡辺海旭氏のための証明書」と頭書されたロイマン直筆の添え状の控えを見せた。

それに目を通した雲来は、目を丸くして羨ましげに言った。「これはすごい。私のに比べると、この熱の入れようはなんだ」

そこには以下の内容が認められていた。

（なお、前掲の「浄土教報」にも「因に今回

渡辺師の留学延長願に添へられたる梵語学教授ロイマン博士の証明推薦状を左に訳載すべし」と付記されて翻訳が掲載された)。

「わが親愛なる門弟子渡辺は非常な熱心と甚だ迅速な領悟(りょうご)とを以てシュトラースブルク大学において数学期間梵語学及びその他の講席に列したり。彼はこれによりインド及び欧亜

荻原雲来師

の思想を通じ、容易にその研究の進路を発見し、現に漸次その貢献により、各種仏教学の講究を策進することを得るに至ろうとす。彼は私の指導の下にすでに『普賢行讃』梵文の公刊を準備している。（以下、海旭が取り組んでいる貴重な歴史文献を挙げ）しかしながら上に記載したすべてこれらの努力が善美の結果を叶えるには、なお多少の時間を要することは、経験ある学者にはわかるであろう。（以下、そのためにはある種の老練が必要と記し）渡辺氏は未だもとよりこの種の老練を得る機会がない。それゆえ彼に謄本及びその他の研究を継続すること、なお一、二年の機会を要するであろう。彼はむろん彼よりして科学的貢献を切望するものに対して恩恵これに過ぎることはない。私はまたこれを付記したい。いわく欧州学徒の信憑すべき学者として立つには大学の教練に五、六年を要し、外国の学徒であれば、少なくともこの時間は欧州で重要な二、三の国語を履修するには必然、別にこれを要するのである。

一九〇三年九月一一日

シュトラースブルク大学　梵語学教授　エルンスト・ロイマン」

雲来はロイマン教授の「渡辺海旭氏のための証明書」を読み終えると言った。「これだと、貴兄は、あと五年、いや六年は、この国にいられるかもしれんぞ。いやはや何ともうらやましい」

「な、何をいう」と海旭は慌てて手を振って打ち消した。「お、おぬしは出来がいいから、ロイマン先生は貴兄の帰国に執着せぬのだ。羨ましいのは、こっちのほうだ。先生は言外にこう言っておられるのだ、渡辺は遊びがすぎるから、もう少しこちらで勉強させなきゃならんと」

それは海旭の本音だった。実際、学究において、雲来にはいささか水を明けられているのではないかと、内心忸怩（じくじ）たるものがあった。

ロイマン教授にサンスクリット学の手ほどきをうけながら、遅々として理解が進まず、これでは碧眼の学徒に日本の大乗教を教えてやれるのは一体いつになることやらと思い悩む毎日だった。いっぽうの雲来は海旭より先に当地にやってきた「半年の長」もあり、ロンドン大学のベンドール教授と、ロシアで出版された梵語大乗教の論考について議論を闘わせていた。それを知るにつけ、雲来との距離は縮むどころか、ますます広がるのではないかと不安を覚え、それはいまもつづいていた。

良き導きの師、荻原雲来

「やはり少し脇見をしすぎたかもしれぬ」と海旭は独りごちながら内心で反省した。そして、そのせいで雲来に頼りすぎたかもしれないとも思った。「す、すまん。独有」と海旭は語りかけた。「独有」とは荻原雲来の号である。にわかに号で呼ばれて雲来は身構えた。海旭から「独有」と呼ばれるときは、きまって海旭の心中に何事か重要な思念が去来した証拠であることを、浄土宗学東京支校（現・芝中高校）以来の長い付き合いで承知していたからだ。

雲来の見立てのとおり、海旭は瞑目すると、思案を巡らせた。

思えば、この四年間、自由気ままにやりながら、それでも、ロイマン教授に愛想をつかされず、遅々ではあるが学問にそれなりの進歩がみられたのは、荻原雲来のおかげだった。

ふと、つい一週間前のことが思い出された。

苦心して手に入れたオペラ座の桟敷席の「ニーベルンゲン」に聞き惚れ、はねたあとに居酒屋で一杯やったことでかえって余韻さめやらず、深更に下宿のアパートにたどりつくと、なんだか自分が主人公のジーグフリートになった気分になり、そのまま屋上にあがって、近所の迷惑もかえりみず、その夜の圧巻の場面をうろ覚えながら、夜空の月に向かって独唱した。夜風でオペラの余韻もいくら

か醒めたので、階段をおりて部屋にもどる途中、隣りの雲来の部屋には薄ぼんやり明かりがともっていて、おそらく机の書灯の下でサンスクリットの古経文と格闘をしている様子だった。と、「海旭、汝も浄土宗の一学生ではないか」と静かに諭す声が聞こえたように思え、海旭は酔いも醒め、部屋に戻ると、書灯を灯して目をこすりながら読みさしの論文の文字を追いはじめたのだった。

それ以前にも、こんなことが幾度あったことか。

酒をくみかわしながら社会民主党びいきの田舎政客と政局を論じておだをあげ、あるいはカトリックの不平党の連中とローマ教皇主義の弊を弾劾して気炎をあげ、あるいは自由思想団の仲間とロシア革命の可能性を論じるなどして、帰宅が深更に及んだとき、きまって雲来の部屋の明かりに諭されるのだった。面白そうな脇道に誘われて、ついつい学問の道がおろそかになりそうなことが幾度もあったが、ぎりぎりのところで踏みとどまって、机に戻ることができたのは、ひとえに彼のおかげであった。

雲来は特段に説教をするわけではない、ただひとり静かに勉学にいそしんでいるだけなのだが、これが海旭にとっては警策となるのだ。まさに荻原雲来は十代からの親友であるだけでなく、「良き導きの師」でもあった。

（この項つづく）

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

FORUM 浄土の広場

●髪

〈特選〉

髪結いの亭主が運ぶ花見膳

井口　吾郎

隣近所、あるいは友人達の花見だろう。妻も座に加わっているのだろう。理髪店の主人が下働きをしていると見てもよいし、誰かが髪結いの亭主を名乗っていると見てもよかろう。とにかく面白い作品になった。

〈佳作〉

髪切ればさらに花冷え歩道橋　山内桃児

花の雲男爵という理髪店　小林苑を

飛び出して危機一髪の仔猫かな　相沢遼子

●大

〈特選〉

花散ってなお大いなる桜の木

月島　恭子

川堤などにずらりと並んだものでなく、孤立して四囲を圧するように枝を張っているのだろう。山桜のたぐいと見たい。花が散って

も葉はすでに出ているのだ。間違っても染井吉野のようなものではないに違いない。

〈佳作〉大道芸見下ろしている遅桜　松谷圭吾

老い五尺力一気に大根引く　浜口佳春

ことことと大根煮つめ日が暮れぬ　山口信子

●自由題

〈特選〉

花の下病の癒えし友の顔

東　保

花の下に座を設け、いま宴会のまっただ中である。その中にしばらく病んでいた友の顔が交じっている。顔色はまだよくないのか、もう全快と見てよいのか。それとなく友の顔をうかがっているのである。

〈佳作〉独り居にひとつ残りし桜餅　村松芳郎

酒ありて良き仲間あり花の冷え　池田伊吹

駅の名に大仏とあり桜咲く　増田信子

誌上句会〈編集部選〉

■髪

長い髪切って見つめた赤い紙　森　懐人
わかめ干す髪長きひとの影動く　早乙女喜栄子
皇后の潤う白髪歴史美る　飯島英徳
花時の艶めく髪や恋生まる　佐藤雅子
父にもあった長髪時代桃の花　笠井亞子
風生まる髪にからまる桜蘂　長谷川裕
身体も髪膚も濡れて花の道　内藤隼人

■大

久かたの豆大福にほほたたき　森　懐人
大緋牡丹散り重なりて土に燃え　早乙女喜栄子
鎮座して春雷聞くや大木魚　佐藤雅子
花むしろ大福餅の粉を吹く　吉本恵子
風光る空のまんなか大飛球　笠井亞子
大あくびしているうちの落花かな　山内桃児
恙なく老人である花大根　小林苑を
曽祖父の酒乱も見たと大桜　井口吾郎
親鳥を大佐と名づけ燕の巣　袖岡　篠
振り向けば露座の大仏夏めきぬ　柴田敦夫
春の蠅じっと動かぬ大広間　皆川魁二
腰低く来るよ大桟橋ゆれて　濱野具円
線路沿い空大きくて桜かな　平　利夫
大きくて丸くて春の鴨の池　安藤治朗
花冷えや上がり框の大時計　富田武雄

■自由題

春嵐三日見ぬ間に花筏　森　懐人
はかなさを引き換えにして桜かな　早乙女喜栄子
その昔女人禁ずの山笑う　佐藤雅子
サクラサイタ黒板消し叩いている　鳥羽　梓
紙箱にパンの押し合う花の昼　西原規夫
仔犬来る花に花屑付けて来る　葦名智雄
蒲公英のぽつぽつぽつと微熱かな　小林苑を
人群れて人うなだれて花筵　大森　栞
右折から不意に花洛となりにけり　山﨑誠太郎
見えていて辿りつけない桜かな　柴田道則
松の花どこ歩いても日の当たる　前島隆介
春灯の路地を濡らしてゆきにけり　松山明生

浄土誌上句会のお知らせ

兼題　意　馬

自由題

締切・二〇一四年六月二十日
発表・『浄土』二〇一四年九月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

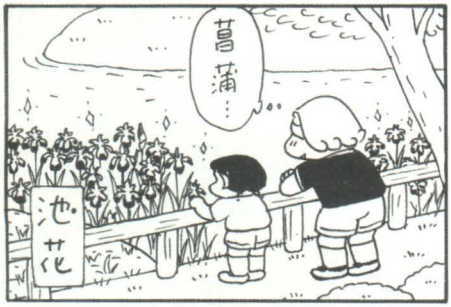
●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

000かい目

さっちゃんはネッ

かまち・よしろう



かまちよしろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。（静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞）

編集後記

姿よき紫陽花の身の羨まし

岱潤

先日東京同宗連（同和問題と取り組む宗教者連帯会議）の仲間と飲んでいて、ある教団の人が「こうした宗派や教義を超えて気楽に飲める仲間がいることって、宗教者の中ではきわめて珍しいことじゃないかな」と言うと、他の人が「だから我々は自分の宗派の中では、はみだしものなんだよ」という言葉が出て、一同吹き出してしまった。

同和問題の担当になると、ほとんどの宗派で専門職になってしまい、長い年月代わることがなくなってしまう。宗派の中でも同和問題は『わかった人がやらないと困る問題』という認識が強く、正にはみ出しものになってゆく。

連休中の東京新聞のコラムに「はみ出しもの」について書かれていた。それは本来の植物についてのことだが、発芽や実りの時期が他のものと違うずれたものがいるのが自然で、そうでなくしたのが品種改良の歴史だそうだ。しかしずれたものがいることで、どんなときでもその植物が生き残りが出来たのだそうだ。「協調性のない、非効率だと切り捨てられてきた『はみだしもの』に潜む力は、どんな花を咲かせてくれるだろう」と新聞は締めている。

私も本誌の編集チーフを受けて今年で二十年になった。編集という仕事も正に専門職で、なかなか代わりのいない仕事でもある。そして見事な『はみだしもの』に違いない。この同和と編集という二重のはみだし人生、いつまで続くことだろう。（長）

編集チーフ　長谷川岱潤
編集スタッフ　斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄（駒ヶ根・安楽寺）
巌谷勝正（目黒・祐天寺）
魚尾孝久（三島・願成寺）
大江田博導（仙台・西方寺）
加藤昌康（下北沢・森巌寺）
加藤亮哉（五反田・専修寺）
熊谷靖彦（佐賀・本應寺）
粂原恒久（川越・蓮馨寺）
佐藤孝雄（鎌倉・高徳院）
佐藤成順（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光圓寺）
東海林良雲（塩釜・雲上寺）
須藤隆仙（函館・称名寺）
高口恭行（大阪・一心寺）
田中光成（町田・養運寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村康雅（清水・実相寺）
中村瑞貴（仙台・愚鈍院）
野上智徳（静岡・宝台院）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
堀田卓文（静岡・華陽院）
本多義敬（両国・回向院）
真野龍海（大本山清浄華院）
朏　博之（網代・教安寺）
水科善隆（長野・寛慶寺）
宮林昭彦（大本山光明寺）
（敬称略・五十音順）

ホームページ　http://jodo.ne.jp

浄土　八十巻六月号　頒価六百円　年会費六千円
昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷　平成二十六年五月二十日
発行　平成二十六年六月一日
発行人　佐藤良純
編集人　大室了晧
印刷所　株式会社　シーティーイー
〒一〇五・〇〇一一
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内
発行所　法然上人鑽仰会
電　話〇三（三五七八）六九四七
FAX〇三（三五七八）七〇三六
振　替〇〇一八〇・八・八二八七

泰雲の美味探訪

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

五郎兵衛醤油　1ℓ 1210円　360mℓ 519円

めんつゆ　1ℓ 864円　360mℓ 400円

東京で希少な近藤醸造株式会社（キッコーゴ醤油）

6月の茶席によくみられる掛物に「渓水山風共清」があります。

耳をすませて谷川のせせらぎを聞きなさい。それが悟りの入口だと。

そんな谷川のせせらぎが聞こえそうな都下・秋川渓谷の入口に、明治41年創業の東京の醤油蔵元、近藤醸造があります。

今回はソイソース（大豆ソース）として世界に進出している日本料理の基本の調味料、醤油の紹介です。

近藤醸造の商品名『キッコーゴ（亀甲五）醤油』は、創業者近藤五郎兵衛の五をとっての名だそうです。厳選した国産大豆と小麦の麹を自然塩水に仕込み、ゆっくり時間をかけて造られた無添加の醤油は、醤油本来の香り、澄んだ色、風味が刺身・海苔につけたとき他の醤油との違いがわかります。ちなみに良い醤油とは、薄めたとき、香り、色、味わいが変わらないものだと言われます。

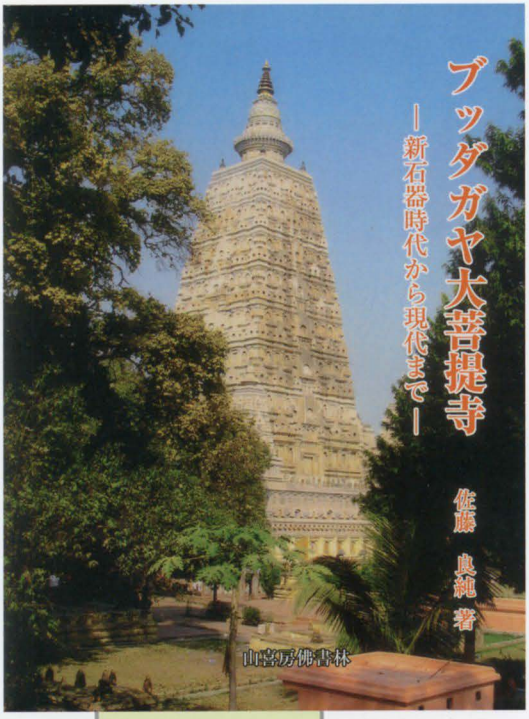
また、無添加の純正醤油に良質の鰹だし、みりん、洗双糖でつくられた甘みを抑えた『めんつゆ』は、煮物、すきやき、肉じゃが等の万能調味料として我が家では大活躍し、『五郎兵衛醤油』共々20数年使い続けています。毎日の食卓に欠かせない調味料です。

近藤醸造株式会社・キッコーゴ醤油
東京都あきる野市山田733-1
電話　042-595-1212(代)　FAX　042-596-4151
営業日時　年中無休（1／1～1／4年始休業）9:00～19:00
商品(税込)　丸大豆醤油　1ℓ 540円

待望の書、刊行なる！

ブッダガヤ大菩提寺

佐藤良純 著



ブッダガヤの歴史
全貌が明らかに！

山喜房佛書林
本体2000円

monthly JŌDO 2014・6 発行人／佐藤良純 編集人／大室了晧 編集チーフ／長谷川岱潤